

---

# NARUTO - 時空を超えた邂逅 -

厨な人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

NARUTO - 時空を超えた邂逅 -

### 【Nコード】

N3618W

### 【作者名】

厨な人

### 【あらすじ】

木の葉の英雄・波風ナルトと九尾の人柱力・うずまきナルト。

決してありえない未来と過去との交わり。その出会いは未来をどう変えていくのだろうか。

最強系です。苦手な人はお戻りを（――）

## 英雄となりし男

『第四次忍界大戦』

忍五大国と鉄の国の『連合軍』VSうちはマダラ率いる『暁』による大戦。

連合軍は四代目雷影・エーを総大将に置き戦闘大連隊・連隊長には五代目風影・我愛羅を置くとかなり豪華なメンバーを揃えている。他にも『写輪眼のカカシ』や鉄の国の長・ミフネなど名の通った者が数多くいる。が、暁のメンバーはそれ以上とも言っていいたいだろう。うちはマダラに協力している薬師カブト、彼によって蘇らせられた数多くの歴史に名を刻むほどの忍たち。穢土転生による現界のため不死身。他にも10万の兵<sup>ゼツ</sup>。初代火影・柱間千樹と彼の細胞を持つヤマトによって強化され簡単な木遁を使う。更に特殊な変化の術により連合軍の忍に化け内部の混乱を図る。客観的に見れば連合軍側が圧倒的に不利だ。

だが、この大戦に勝利したのは連合軍。

風を変えたのはこの大戦の護るべき者。九尾の人柱力・うずまきナルト。

九尾の力をコントロールした彼は『悪意』を感じ取ることができる。それを使いゼツを撃破。

八尾の人柱力・キラビーや『別天神』により正気を取り戻したうちはイタチと共に薬師カブトを倒し、穢土転生の解除。

『うちは』の真実を知り里を裏切り、復讐の道をたどるうちはサスケとの邂逅。激戦の末、和解に成功。

黒幕・うちはマダラとの戦いは十尾が復活し、十尾の人柱力になる  
ところを阻止、逆に十尾の人柱力に。それによる陰陽遁を使い死闘  
の末勝利を収め、この大戦にピリオドを打つ。

後に彼は姓を父の波風に変え『木の葉の英雄』と呼ばれる。更に同  
期である春野サクラ・うちはサスケとともに『新・木の葉の三忍』  
とも呼ばれ、里に貢献。父・波風ミナトのお気に入り『飛雷神の術』  
を極め、母・うずまきクシナの故郷『渦の国』の封印術も数多く学  
ぶ。彼にとって今が一番幸せな時期だといえるだろう。

……が、やはり幸せはそう長く続かなかった。

うちはマダラの負の遺産。最期に自分の全てをかけてナルトにかけ  
た死の呪印。同じうちであるサスケにも解呪は不可能だった。発  
動までに4年。そして今日が……

「ナルトッ」

かつてペインによって破壊された里は復興し、また今回の大戦で亡  
くなった数多くの忍の名が刻まれている慰霊碑。その目の前には虫  
の息同然の英雄。周りには同期の忍たちをはじめ里人、他国の忍。  
五影の姿も見られる。たくさんの人に囲まれ今英雄の最期の一言が。

「ああ、幸せだったてばよ。こんな多くの人に認められて」

それが男の最期の言葉の筈だった。

【そうは問屋がおるさんぞ？ナルト】

## 英雄となりし男（後書き）

始めまして、厨な人です。

初投降なので何か感じるところもあるかもしれませんがそこはアドバンスなどよろしくお願いします。

初投降だからということをお願いにしないよう頑張っていくので応援をお願いします！

・・・・・・・・・・もうしていましたが（笑）

## 時空を超えて

「……………俺は死んだはずじゃ？」

俺、波風ナルトはうちはマダラによる呪印で死んだはずだ。

「それに、ここは……………妙木山!？」

かつて仙人モードを学んだところ。そこに今居た。

【やっと眼を覚ましたか、馬鹿者】

「……………十尾」

『十尾』

一尾から九尾までの尾獣の集合体。

第四次忍界大戦の最中、復活した獣。その際俺の中に居る九尾とキラービー【このおっちゃん】の中に居る八尾が剥がし出された。渦巻き一族の末裔である俺は尾獣が抜かれてもその生命力で何とか生き永らえる事ができた。だが、ビーのおっちゃんは違う。尾獣を完璧にコントロールした為か即死とは至らなかつたが、それでも危険な状態だった。四代目来影でありビーの義兄でもあるエーがすぐに駆けつけ雷遁による電気マッサージをした御蔭か存命し続けることができた。が、これで二人、しかも最強クラスの二人が戦線離脱したことに等しかった。幸いにも十尾は復活しても打ちはマダラが気に入らなかつたのかその身に封印されることを拒み反抗。その際に元九尾の人柱力であつた俺こと波風…………… 当時はうずまきナルトが、九尾のときと同じように会話。それにより十尾がナルトに封印される。これを見て切れたマダラが写輪眼と輪廻眼をフルに使いナルトを襲う。そのとき奮闘していたナルトに刺激されたのか十尾の心変わり。それまではチャクラしか力を貸していなかつたのから一変して協力をし始める。マダラから奪つた陰陽遁を授け、仙人モードの為の『動くな』の手助けをしたり、と。『血』に影響されたのか瞳術も得る。写輪眼と輪廻眼を重ねたような形状の眼『創始眼』。これにより戦況は

一変。マダラの写輪眼も輪廻眼も創始眼の前には無力化され、遂に本来の意味で死を迎えた。兄弟の愛が成せる業なのかビーも復活。涙を流して抱き合う二人に忍一堂は暖かい眼差しを。……………木の葉一部では『こいつ等もか……………』と思っていたのも居た模様。

【久しぶりの現世じゃ。そう簡単に死なせると思ったか？】

「（な……………っ！？なら、なんで言わなかった！？）」

【落ち着け。先に言っとくがああ呪印は儂とて解呪は不可能。世界に刻まれた一種であったからのう。それから逃れることは普通はできぬ。そこで……………】

「（……………時空間忍術による別時空への移動？）」

【……………さすがは彼奴の息子。ドベと言われた時代が思い浮かばんぞ】

「（煩い……………でも別時空って伝説じゃ？）」

【確かに人の身では伝説じゃろう。じゃが儂は尾獣じゃぞ？】

「（……………人の常識にとらわれるな、か？）」

【そうじゃ】

「（なら、ここはどこだ？妙木山じゃないのか？）」

【いや、妙木山であってある。ここには未来を見る大ガマ仙人が居るはずだ。……………説明が省けるぞ？】

「（そういう意味かっ！？）」

【……………ということでは会いに行くぞ】

「（スルー！？）」

【道は変わってないはずじゃ。覚えているか？】

「（……………ああ）」

どうやらナルトは十尾に勝てないらしい。（……………どうしてそうなる？by作者）

「よく、来たのう。別時空からの旅人よ」

妙木山の奥にある神殿。大ガマ仙人の住居であり大ガマ仙人・二大仙蝦蟇との謁見の間。今ここには上記三名（体？）の蝦蟇。そして、蝦蟇との契約者・・・自来也。

「（エロ仙人!?!）」

【ふむう。ここでは彼奴は生きておるのか。……いったいどのくらいの時間軸じゃ?】

「僕の未来視でいう、ある程度事情は分かっている。……がのう、肝心の名前が分からんのじゃ。できれば教えてくれないかのう?」  
へ?状況が分かって名前が分からないってことなんてありえるのか?

【大ガマ仙人といえど完全じゃない、ということじゃろう】

……心を読むな。

「ナルト。…波風ナルトだってばよ?」

【昔の口調に戻っておるぞ】

……はッ!?!?

「ナルト……のう。さて、何か聞きたいことはあるかのう?」

「じゃあ、こここの時間軸を。ここ最近木の葉に何かあったとか……」

「もう俺は生まれてるのかな?」

「……確か数年前に木の葉は九尾に襲われたそうじゃ」

「三年前だって、父ちゃん」

……なら俺は三歳か?この時期は火影の爺ちゃんと暮らしてたよう  
な。

「……お主、ミナトの息子……か?」

エロ仙人。……そいや居たっけ。

【お主、何気にひどいのう。師匠だろ?】

「（……今振り返ればあれは反面教師、というやつじゃ?）」

【…こやつの声には疑いの感じは含まれてない。恐らく確認の意味  
合いじゃろう】

「（またスルー!?!?まあ、この容姿だし。自分でも父ちゃんと瓜二



つだと思つよ)」

そう、今のナルトの姿はミナトそっくりと言ってもいい。顔には母クシナの面影も見られるが。

【あの術を見せればいいだろう？……ミナトと間違えられるかも知れんが】

「（……だな）」

意識を少し集中させ、忍術・瞬身の術を発動する。カカシやエーに『木の葉の黄色い閃光』を超えたといわせた速さで簡単に自来也の後ろを取る。

「これでいいかな？」

「……！」

振り返った自来也の顔は驚愕の表情。それと同時に確信も見え隠れしている。大凡父ちゃんではないかと疑っておるのだろう。そんな自来也に腹の封印式を見せる。

「これでいいってば？」

「……………本当にナルト、なのか？」

「ああ。名付け親だろ？」

笑って答える。……………これからどうしよう？

「それでお主、名前はどつするんじゃ？」

「え？」

「うずまきナルトはこの世界にもう存在しておる。同じ名前はいると不味いじゃろう。」

……………確かにエロ仙人の言うとおりだ。この世界にはこの世界のうずまきナルトが存在している。その居場所を奪つような真似はしてはいけない。

「……………氏は『海風』でいいかな？父ちゃんの親戚らしいし」

「海風、のう。確かに今は亡き里に住んでいた波風の親戚。それならその容姿にも説明がつく」

「問題は名前…か」

「……クシナとミナトからシナトっていうのはどうだ？」

「…シナト、海風シナトね。うんOK」

【またこやつが名付け親じゃのう】

ハハハ。確かに。……でも悪い気はしないよ？

「よし、それじゃあ木の葉にいこうか。シナト」

「え？」

「忍者登録じゃよ。お主木の葉で働くつもりじゃろ？」

「ああ、うん確かに。…その前に蝦蟇契約したいんだけど？」

「……おお、忘れとった。……ほれ、これでよし」

「よし、それじゃあいこうか。…“エロ仙人”」

「エロ仙人!？」

「おう。呼び方だ。ぴったりだろ？」

「どこがじゃ！」

「「小僧にはぴったりじゃ」「」

「…フカサク様、シマ様」

自来也は二大仙人蝦蟇には勝てないらしい。

## 時空を超えて（後書き）

第二話投稿しましたー。

3点リーダ使いすぎたかも…（汗）

ナルト…シナトの一人称が決まらない（泣）

一般的な口調と昔の口調を合わせた感じでないところかな？  
アドバイスなどあったらお願いします。

これからもよろしくお願いします

## 日向の姫

妙木山で蝦蟇との契約を済ませた後、自来也エロ仙人に飛雷神の術のマーキングを施した札を巻いてあるクナイを渡した。その後、フカサクじっちゃん仙人が自来也を逆口寄せしたところまで飛ばし、その後俺自身が飛雷神で飛ぶ。あたりの明るさからして夜みたいだ。

「ここってどこ？」

「火の国と雷の国との境の森だ。木の葉までは急いで1日といったところか。」

「ふーん。…なら急ごうぜ」

「うむ」

【ナルト、気付いてるか？】

「（…ああ。あと今の俺はシナトだぜ？）」

【おお、すまん】

木の葉の里が見えてきたとき、感知範囲に複数のチャクラを捕らえた。…複数といっても2つだが。

「エロ仙人。木の葉ってこんな時間にも任務に出かけるの？」

「…む？基本この時間帯は暗部だろう。じゃが、今日は確か雲隠れとの和平条約の日じゃ。暗部はそちらの護衛に回されているはず。」

「…それがどうした？」

「…それって機密じゃ？まあいいか。」

「二つのチャクラを感知。このままだともう少しで接触する」

「…何？」

「俺ん中の十尾による特異な術だ。…信用度は抜群だぜ？」

「待て、十尾じゃと？それは何じゃ？…じゃが、今それは置いてその話が本当ならおかしいのう。今の木の葉は基本スリーマンセル以上だ。暗部も含めて、な」

「…緊急事態かなんかが発生したのか？とりあえずエロ仙人は隠れていてくれ。何が起るかわからない。念のために…な？」

「…分かった。死ぬんじゃないぞ？」

そういつて変化の術を使いながら木の上に行く。…なぜ蝦蟇に変化？鳥でいいじゃん…。

【そんなこと言ってる場合じゃないぞう。…お客さんじゃ】

現れたのは一人の男と男に抱えられた少女。少女の目は木の葉二大瞳術の一つ『白眼』。

そして、男の顔には額当て。そのマークは木の葉の物ではなく…。

「…なぜ雲の忍、しかも忍頭がここに？しかもその少女は日向の者。

……和平条約は所詮口だけか」

「チツイ。なぜここに居るかは知らんが見られた以上……死んでもらう…！」

【…その台詞、お約束じゃのう】

「（…全くだ）」

「雷遁・地走り！」

雷撃が地面を流れて向かってくる。…腐っても上忍なんだろうか。その威力は普通のより大きい。

だが、一度とはいえ雷影と対峙した事がある俺にとっては雀の涙。しかも、性質変化も“雷”。“風”の前では無意味。迫る雷撃に対し右腕を向け術を発動。印を組まないで済む俺の得意技の一つ。

「風遁・螺旋翔破！」

打ち出された風は雷撃を破り忍頭に迫る。…が、日向の少女を盾にしたのを見るや否や術を解く。

「チツ」

「くくくくく。さあどうする？それ以上近づくならこいつを殺すぞ

？俺はそれでも構わないがな。」

…眼さえ手に入れば生死なんて関係ない、か。…この糞つたれ！

「ほーら、手を頭につけて跪け。」

少女を前に出しその首にクナイを近づけながら命令してくる。ここでの選択は“相手の言うことに従う”がおそらく正しいだろう。…一人ならば。

【かかったのう】

「（…さすがは三忍、といったところか？）」

忍頭の腕にクナイがささる。それは木の上で蝦蟇に変化していた工口仙人が放った物。想定外からの攻撃に忍頭は動揺する。

- 瞬身の術 -

その一瞬で俺は瞬身の術を使い少女を助ける。腕の中に抱いた少女をよく見てみるとその面影に見覚えがあった。…それは、かつて自分のことを好きだといってくれた女性。

（…ヒナタじゃねえか）

『日向ヒナタ』

日向宗家に生まれ自分と同じ忍道を持つもの。ペインが里攻めをした最中、自分のピンチに現れ助けようとして逆に怪我を負わせてしまった。そのとき告白され答えを返す前に第四次世界大戦が開始。終戦時にはもう自分の死は確定したため何かと理由をつけて断った。そのときは呪印について教えてなかったが、後で発表した際、般若を従えてお話：O・HA・NA・SHIに来たときは父ちゃんと母ちゃんとおってしまった。少なからず惹かれていたのは確かだ。呪印がなければどうなったかは分からない。俺『うずまきナルト』の人生に大きな影響を与えた女性だ。

（…ありがとな）

分からなくてもいい。伝わらなくてもいい。それでも…言うておきたかった。

近くの木の下に寝かせ結界・四頂空間を発動する。ヒナタの安全が確認されたのを見、再び忍頭と向かい合う。…どうやら自来也が足止めをしておいてくれたみたいだ。

「（…十尾、あれを使う）」

【…分かった】

第四次忍界大戦で得た眼。この世の理を壊すため使用を控えている眼。それを開放する。

「ここからは戦いではない。……寐だ」

- 月詠 -

万華鏡写輪眼の瞳術の一つ。一秒を三日に変えるほどの力をもつ眼。忍頭はこれに逃れられず術に堕ち、意識を失う。

「シナト、…その眼は？さっき言っていた十尾とは何じゃ？」

「…エロ仙人。その話はもう少し後で。…どうやら迎えが来たみたいだし」

その後三つの人影が降り立つ。背中にかかるほど伸ばした黒髪の男性が二人。おそらく双子だろう。そしてもう一人は娘とも妹とも見える黒髪の女性。男二人より長いそれは腰に到達している。

「自来也様！？……それにシナト！？」

「日向家当主か。それに其方は…弟君と娘か」

「俺は波風ミナトの従兄弟、海風シナトです。宜しくお願いします。」

黒髪の男性の一人は日向ヒアシ。日向家当主にしてヒナタとアカリの父。そろそろもう一人産まれる予定の幸せ者だ。

もう一人の男性は日向ヒザシ。ヒアシの双子の弟で分家の者。ネジ

の父でもある。

そして日向アカリ。ヒアシの娘にして『日向の姫』として名を知られている。

「ヒナタは、ヒナタはどこですか…ッ！」

日向の姫は淑やかな美女として知られているため今の姿は想像できない。おそらく今ここにいるのは『妹』を心配する『姉』らしい。

「無事じゃよ。…のうシナト」

「ああ」

自来也がシナトを促すため結界を解除し抱き連れて来る。

「結界を敷いたからな。怪我はしてないはずだ。」

そう言いながらアカリに手渡す。腕の中に入れた途端安堵のあまりか涙を流し倒れこむ。目の前にいたシナトは避けずに逆に受け止める。

「よかつたッ。…本当によかつたッ」

その口から漏れる微かな嗚咽。おそらく自分にしか聞こえてないだろう。ヒナタごとアカリを抱きしめ落ち着かせる。

しばらくして二つ殺気に気づく。

「（…あれはヒアシさんとヒザシさん？なぜ俺に殺気を？）」

【自分の体制をよう見てみい】

そう、今シナトはアカリを抱き締めている。親には娘が取られたように見えるのだろう。更に二人の間にはヒナタの姿が。アカリはヒナタと結構年が離れている。そのためそれは両親に挟まれた娘のように見える。それが更に拍車をかけているのだろう。…アカリも気付いたのか顔を赤くしている。抱擁を解き、空気と化していた忍頭と向き合う。…その際アカリが残念そうにしていたのは誰も知らない。



「こいつが今回の主犯です。…今は眠っていますがどうします?。」

「……火影様のところに連れていこう。自来也様と…えっと」

「海風シナトです。…日向当主さん?。」

「ああ、私は日向ヒアシ。此方が弟のヒザシで長女のアカリ。そして次女のヒナタだ。この度はありがとう。君がいなければきっとヒナタは攫われていただろう」

「いえ、此方も偶々です。木の葉に向かっている最中でしたので」

「木の葉に…か?よければ一緒に行かないか?もう少し詳しいことも知りたい」

「構いませんよ。な、エロセ…師匠」

目線が、目線が怖いです。エロ仙人。

## 日向の姫（後書き）

オリキャラ兼ヒロイン登場！

地文の名称が目茶苦茶！！

読み難いでしょうがこれからもお願いいたします。

## 木の葉の忍に

ヒナタを寝かしに帰宅したアカリを除いた4人は火影室にきていた。  
コンコンッ

「火影様、ヒアシです。」

「入れ」

しわがれながらも威厳が籠っている声の中から返ってくる。

「失礼します。」

「ふむ。珍しいの。双子揃ってくるなど。そして自来也も………ミナトッ!?」

シナトを認識するや否や声を上げる火影。

が、それはある意味しょうがないと言えるだろう。

木の葉の民は皆家族。そうは言えどやはり順位というものはできてしまう。

自分の家族はもちろんの事、弟子もそのランクでは上位に入る。それは、たとえ木の葉に反旗を翻していても、だろう。そんな弟子の弟子。言わば“孫”だろう。彼は実力を認められ過去最年少で影の名を背負い、木の葉を護るために命を落とした。背は記憶にある彼より低いがそんな人の瓜二つが目の前に現れたのだ。今だ椅子から離れないという理性が信じられないほど。

「あー、じじい、落ち着け。此奴はミナトではない」

「始めまして、火影様。波風ミナトの従兄弟・海風シナトです。この度は木の葉の一員になろうと思ひ、足を運びました。」

そう挨拶をした途端、自来也が信じられないような顔をして此方を振り返った。

「お主、きちんとした挨拶ができたんだのう」

一人口程度の音量。火影には聞こえてないだろうがシナトを始め、

ヒアシ・ヒザシ兩名はすっかり聞こえていただろう。その顔には……  
「（青白い？）」

【お主、無意識に殺気を出すのはやめようの】  
どうやらシナトの殺気に当てられたようだ。若干室温も下がっている。

【いい加減収めえ。そろそろ自来也が卒倒するぞ？】  
あの日向のトップ2が間接的な殺気にこれだけ怯えているんだ。三忍といえど直接当てられている自来也はもう半ば意識が飛んでいるだろう。完全に意識が飛ぼうとし……ようやく殺気が収まった。

「…ふむ。何を言ったのか知らんが自来也に向けられていた殺気は本物。木の葉の一員になりたいといったがその力、何のために奮う？」

どうやら火影も気付いていたようだ。顔色を変えていない辺りはさすがと言えよう。…弟子に向けられていたのに平然としている辺りは信用の現われなのだろうか？疑問が残る。

「護りたい者を護るため。そして父ちゃ…ミナトの火の意思を受け継ぎ、伝えるため」

「…ッ」

絶句。

シナトの出生を知っている自来也はある程度予想はしていただろう。だが、それを知らない火影や日向の二名は息を飲んでた。今ここにいる金の人に四代目火影の姿を重ねてしまうほどに。

「…シナト、と申したのう。お主はどんな術が使える？」

「ミナトと共に開発した螺旋丸と飛雷神。後は風遁と…封印術ですかね？」

これまた絶句。

使える術まで瓜二つ。もう本人と言われても信じるだろう。

「時々シナトが里を離れていたのもこのためか？」

このため、それは術の開発のことを指すのだろう。…正確には里外にいた自来也と開発していた訳だがそこら辺は口裏を合わせてある。

「うむ。…ではこれより海風シナトを特別上忍に任命する。責任者は自来也。そして、主な仕事は自来也の付き人。良いな？」

「あい、分かった。この中でシナトとの面識が一番長い儂が責任者には適任じゃろう。付き人も構わん。」

『特別上忍』

中忍以上の力を持つ忍に与えられるランク。その中には暗号部の者や医療系忍者などが主だ。

稀に里から力を認められた上忍に付き人が与えられる。その者もこのランクにあたる。

任命する方法は三種類。主なのは試験に合格すること。他には上忍に任命されるか、火影に任命されるかだ。上忍や火影に任命される場合、その者が里にとって不利益なことをした場合の責任者が一時的に必要となる。一般的にその責任者は任命者。火影の場合も同様だ。稀に親類が責任者になることもある。

「ふむ。それでこの後はどうする気じゃ？」

火影は問う。自来也に目線を送ると、『おぬしの好きにせい』的な感じで返ってきた。

「取り合えず、二・三年は木の葉に留まるつもりです。地理や住民の人柄なども把握しておきたいので。それから付き人の仕事に入るうかと。」

「自来也が帰ってこなかった場合はどうする？」

「飛雷神の術式が書かれたクナイを渡しておきます。」  
「捨てられた場合はどうする?」  
「そこまで落ちぶれておらんわあ!」  
「自来也が口を挟む。」  
「問題ありません。術式に少し細工をしておきますので」  
そう返す。その答えは意外だったのか火影が呆けてる。自来也は少し震えているな。  
「それまでどうやって生活する?」  
「…何か適当な任務を受けようかと。構いませんか?」  
「うむ。人では大いに越したことはない」  
これで金銭も目処が立った。後は、  
「住まいはどうする?」  
それが問題だ。  
「…どこかいい物件はありませんか?」  
「…すまんのう。今はないじやろう。後2、3ヶ月すれば空が出ると思うがのう」  
それは困った。いつその事長期任務にいかうか?  
「…日向家はどうぞでしょう?」  
「うむ。我が家に来ると良い。ヒナタの恩人だ。文句も出まい」  
ヒアシさんとヒザシさんが提案をする。かなり魅力的だが、  
「いいんですか?」  
「ああ」  
そう言われて火影に目線を送る。気付いたのか頷いた。  
「ではヒアシ殿。宜しく頼むぞ。」  
「承りました。」  
「火影様、ヒアシ様、ヒザシ様。ありがとうございます。」  
礼を返す。衣食住の一つを提供して頂くのだ。これぐらいは当然だろう。  
こうして、波風シナトの日向家生活が始まった。

「シナト」

「はい？なんでしよう」

「もう少し楽に話せないのかの？」

「…はあ」

「それは私も思っていた。これから寝食を共にする身。肩に力を入れていたら休めるものも休めんぞ？」

「私も肩苦しいのは嫌いな性分だね。できれば頼むよ」

「…儂も呼び方を変えてくれないかのう？」

「…分かりました」

こうして呼び方が決まった。

火影 爺

ヒアシ ヒアシさん

ヒザシ ヒザシさん

自来也 師匠またはエロ仙人

「儂は結局変わらないのか~~~~~~~~~!!!!!!」

## 木の葉の忍に（後書き）

厨な人です。

少し更新が空いてしまいましたたがら話目です。

土日は更新はできるけど他の日は少し厳しいかもです。

できるだけ毎日更新していくのでこれからも宜しくお願いします。



## 過去との邂逅

時間が時間だったためヒナタは就寝中。アカリも付き添いみたいだ。シナトも部屋に通され疲れを取るため直に眠りに落ちた。

次の日の朝食時、挨拶をすることに。

「改めて。海風シナトです。暫く滞在させていただくことになりました。宜しくお願いします」

「日向アカリです。宜しくお願いします」

「えっと……ひゅ、日向ヒナタです。……よろしくおねがいします。」

アカリはシナトの姿を見て驚いた顔をした。

ヒナタの方は昨晚の事は覚えておらず、どういう経緯でこうなったかは誤魔化す事になった。しかし、いつまでも黙っている訳にはいかず時を見て話すことも決まったそうだ。朝食後はヒアシさんに呼ばれ移動。これからの生活と明方のことについての話だった。

「取り合えず“雲”とは忍頭という決定的な証拠があったため相手側の誤魔化しは効かず忍頭と膨大な資金との交換と言うことで落ち着いた。」

「戦争にはならないんですね？」

「ああ、そこら辺は火影様が対応してくださった。」

「それはよかったです。」

「あと、これから任務が入るだろうから裏口の鍵を渡しておく。昼間は正面から構わないが門限以降の出入りは裏口で頼む。」

「分かりました。」

「風呂の時間は皆バラバラだ。入るときには一言言ってくれ。」

「了解です。」

「あと…これが火影様から。」

そういつて出された口寄せ用の巻物。許可を取り中身を確認。

……其処には百万両のお金が。

「雲”からの資金の一部だそうだ。是非お礼に、と。」

「…ありがとうございます。でもこんなにはちよつと…」

百万両と言えはしばらく遊んで暮らしていけるほどだ。

いくら今回の件に直接関わっているとはいえ抵抗がある。

どうしようかと考えていると一つ案が浮かんだ。

「では、この一部を日向に。滞在費、ということを受け取ってください。」

そういつて半分の五十万両を差し出す。…これだけの大金だと金銭感覚がおかしくなってくる。

実際におかしかったのだらうか四十万両は返された。

「滞在費となればこれだけで十分だ。…気が重いかもしれないが貰ってください。」

「……はい。」

ヒアシさんの部屋を出て与えられた部屋に戻るとき、丁度隣からアカリが出てきた。

どうやら部屋はアカリの隣のようだ。

「あ、シナトさん。どうしたんですか？こんなところで。」

「アカリさん。いや、部屋に戻っているところだ。見るところここの隣だが。」

「…えっ!？」

アカリ本人も知らなかったそうだ。顔を赤くしている。

「…あつ、そうです。私のことは呼び捨てで構いません。見るとこ

る年は変わんないみたいですし。…失礼ですがお年は？」

「えっと、はた…」

【おお、言い忘れておった。お主此方に来て、年は16まで戻ったぞ？呪印の性で成長してないから分らなかつたかもしれないがのう】

「（…マジ？）」「

【おおマジじゃ】

「…どうかしました？」

口籠ったのを不自然に思ったのか声をかけてくる。

「いや、なんでもない。えっと16歳だ。」

「あ、そうですか。私は13ですのでやはり呼び捨てでお願いします。」

「ああ、分かったよアカリ。俺のことも呼び捨てで構わないが…。」

「これが性なので。気分を害されましたか？」

「いや、それなら構わないさ」

この後も軽く談笑をしてから別れ、火影邸に赴く。

話の最中にアカリが時々顔を赤くしていたがどうしたのだろうか？

時・場所変わり火影邸。

「（さて、今日から任務か）」

【うむ。暫くは個人で受けることになるからのう。気をつけるのじやぞ？】

「（はいはい、分かっているよ。いざとなったらサポート頼むよ？）」

「

【ああ】

十尾と会話をしながら火影室までいく。……が、その途中の角で金を見た。

(ん？今のつて…まさか…)

気になって少し寄り道を。角を見てみたら其処には予想通りの人がいた。

金の髪に青の瞳。海風シナトになる前の自分、『うずまきナルト』だった。

「お兄ちゃん、誰？」

此方に気づいたのか声をかけてくる“ナルト”。その声には恐怖が人見知りかなんかなのだろう。現に自分にも子供ときはよく疑心暗鬼になったことを覚えている。

「俺は海風シナト。君の名前は？」

しゃがんで視線を合わせる。“波風ナルト”だったときサクラから教わった子供とのコミュニケーション。子供と話をするときには必ずやらなければならないことらしい。

「ナルト。うずまきナルトだつてばよ。」

名前を言う“ナルト”。どうやら理由は知らないながらも避けられているのは分かっているみたいだ。瞳には不安が隠れてない。

「ん。よろしくね、ナルト。」

それを刺激しないように優しく返す。心からの笑みを浮かべながら頭をなでる。一瞬ビクツと体を震わすが頭を撫でられて安心したのかされるままになる。このまま撫でていたいという気持ちになるが…いつまでもこうしていたいがそうもしてもらえないのが今の現状だ。

「そろそろ任務があるから行かないと。ごめんね、ナルト」

それを聞いて顔を暗くする。……ものすごく罪悪感を感じます、はい。

けど、それも暫くしたら消え、笑顔になる。

「それだつたらしょうがないってばよ。任務頑張つてば、シナトの

「兄ちゃん！」

「どうやら俺は兄ポジションらしい。」

「ん、ありがとう」

「こうして“過去”と分かれる。」

(今日はいいことありそうだ)

この後ご機嫌なシナトが火影室で見れたらしい。

くシナトが火影邸にいるときの日向邸く

「父上！」

「…む。アカリか。どうした？」

「どうしたではなくて！どうしてシナトさんの部屋が私の隣なんですか！？」

「其処しか空いてなからう。」

「客間があるではないでしょうか！」

「長い付き合いになる。いつまでも客間に居られるのは困るからな。」

「それでもっ…！」

「それにアカリ、お主本当は嬉しいんではないか？」

「……な、な、な、な、なな」

「出会ってまだ一日もたつてない。……一目惚れか？」

「……し、失礼します！」

こんな会話が親子間であったようだ。

## 過去との邂逅（後書き）

はいー、厨な人です。

過去ナル登場！どのタイミングで日向と絡めていこうか。現在推敲中です。

多分明日も投稿出来ると思うので宜しくお願いします。

## ある日の木の葉

シナトが木の葉の忍となつて早1ヶ月。

四代目に似た容貌もあつてかすく里中にその情報は駆け巡つた。

曰く、四代目の親戚だと。

曰く、三忍の付き人だと。

曰く、四代目と同じ術を使うと。

その力を見せるために模擬戦も行われたりした。本来忍は自分の手の内を見せない。手の内を見せるということはそれだけ自分の力に自信があるのか、それともそんなことさえ思いつかないのかの大方二択。勿論のこと、シナトは前者だ。

その試合の相手は二人。共に木の葉の五指に入るだろう。一人は四代目の教え子、『写輪眼のカカシ』。もう一人は、自称カカシのライバル『蒼き猛獣マイト・ガイ』。

カカシは暗部に属しているはその力は有名。故に、自身の全力を出した。左眼の写輪眼でコピーした数多くの忍術を惜しみなく使ったが、中距離から遠距離の忍術は螺旋翔破で返され、近距離忍術は螺旋嵐壁の前に無力化された。雷を切ったという事から名付けられた切り札の“雷切”も風の性質変化を加えた螺旋丸の前に敗れる。

ガイは“木ノ葉剛力旋風”を始め、得意の体術で攻めるが螺旋嵐壁の防御を破ることはできなかった。此方もカカシ同様切り札である“八門遁甲”の第六・景門まで開き“超高等体術・朝孔雀”を使うが、見切られ螺旋丸を喰らい敗れる。



この二人に共通して言えることは一つ。シナトの“速さ”に追いついていないこと。  
瞬身の術は勿論のこと術の行使・判断など様々な面で追いついていなかった。

…螺旋丸系統は印を結ばないので当然かもしれないが。

それはさて置き。こんな面で見せ付けたシナトには当然異名が付く。

四代目が開発した“螺旋丸”を使いこなすことから『螺旋のシナト』  
。 どうやら螺旋丸が未完成の術だという事を知っている人は少数派らしい。

その少数派であるカカシはすぐさま其れを尋ねた。その際ガイも乱入し、結果的にはよい友好関係を築いた。

そんなことが去ったある日のこと。

シナトはアカリと共に火影邸を訪れていた。シナトは昨夜の任務の報告が未だだった為。アカリは日向からの文書を持って。当主が出向わない辺りそんなに重要な書類ではないだろう。シナトもシナトで報告は後でも良い任務。そこまで機密ではないため共に火影室に入室する。それも10分程度で済み退室。今日は二人とも非番だったため如何するかと話し合い始めたところで人影に気付く。其方も気付いたのか近寄ってくる。

「シナトの兄ちゃん！」

どうやらナルトらしい。

「ん。おはよう、ナルト」

おはようだってば、と元気よく返しながらアカリを見る。どうやら此方は初対面のようだ。

「日向アカリよ。よろしくね。」

「俺はうずまきナルトだってば。よろしくだってば、アカリの姉ちゃん！」

日向一族は四代目と交流があった。そのため九尾襲撃の結果や四代目の息子のことも知っているらしい。故に嫌悪感がないことやシナトと共に居たからであるうナルトも直に懐いた。

「今から任務だってば？」

「いや、今日は非番だよ」

「なら、遊べるってば!？」

蒼い目を爛々と輝かせて此方見つめるナルト。シナトは苦笑しながらそつとアカリの方を見ると此方も苦笑しながらこちらを見ている。どうやら考えてることは一緒みたいだ。

「私たちと一緒に里回ろうか？」

アカリが聴く。里という単語で少し顔を顰めたナルトだが一緒に居たいのだろう、直ぐ首を縦に振る。

「それじゃあいこうか。」

まずは日向家に行きお金を取って昼はいらないと報告する。その理由を話したところヒザさんは意味有り気な視線をアカリに送っていた。

それから商店街に足を運びいろいろな店を回る。里人はナルトの姿を見ると其の顔は憎悪に染まるが、両隣にあの『螺旋のシナト』と『日向の姫・アカリ』がいることに殆どの者は困惑の表情に変わる。一部それでも憎悪が抜けていない人、或は店には近付かないよう配慮しながら過ごす。昼時が近付き、ナルトも歩き回った成果お腹が

なっている。それをアカリと笑いながら御馴染の“一楽”へ。どうやらアカリも一楽には着たことがあるらしく反論なしで昼食は決まった。

「らっしやいつ」

テウチさんの威勢のいい声が。

「ラーメン3つで」

「あいよ！」

ナルトは来たことがないのかソワソワしている。そんなナルトを眺めながらアカリと今日のことやこの間の任務のこと、日向での暮らしなどの話をした。時々ナルトも話の輪に加わった。

「はいよっ！」

そんなことをしている間にいつの間にか出来上がったらしい。ナルトは初めてのラーメンに興味津々みたいだ。

「じゃあ、いただきます」

「いただきます」

俺の一言の後にアカリとナルトが続く。俺はある程度豪快に。アカリは上品に。ナルトは俺を真似て食べ始めた。ナルトが一口入れるや否や、

「うまいってばよ！」

叫ぶ。どうやら気に入ったらしい。テウチさんも笑顔だ。

「坊主。どうやらラーメンは始めてみたいだな」

「ああつ。…あと、坊主じゃないってば。ナルトだつてば。」

「そうか。よし、ナルト！こいつはおまけだ！」

そういつてナルトのラーメンに又焼チャーシューを乗せる。

其の後も楽しく食事を続けまた来るよと言いつ残し去る。お腹が一杯になったこともありナルトは限界が近付く。軽く散歩しながら火影邸に連れて行き「また行こうね」といつて寝付かせる。

其の後はアカリとこの前使用した忍具を補充してから甘味処『花よ

り団子』へ。  
其の後は二人で木の葉を回りながら帰宅。その際よくやった的な顔をしたヒアシさんとヒザシさんが。

そんなことが本日のシナトの生活だった。

〈其の日の木の葉〉

「何で九尾のガキが『螺旋』と『日向の姫』と一緒に居るんだ…っ」

「…っ そうだそうだ！」

「何で九尾のガキがあんなに幸せそうなんだよ…っ」

「…っ そうだそうだ！」

「何で九尾のガキが『螺旋』と瓜二つなんだよ…っ」

「…っ そうだそう…え？」

「だから何であんなに『螺旋』と似てるんだ！」

「それだよ！」

「『螺旋』と似ているけど四代目とも似ているよな」

「そりゃ『螺旋』は四代目の親戚だからな」

「ということは九尾のガキも…？」

「ハハハ。確かに容姿は似ているが性格は全然違うぞ？」

「其の通りだ。どちらかと言うとクシナさんと似ているぞ。ほら火

影婦人の」

「ああ、あの『赤い血潮の八バネ口』か」

「確かにな」



## ある日の木の葉（後書き）

久しぶりです。遅くなってしまいました。が第六話です。

最期はネタバレするとフラグですね。ナルトがもしかしたら四代目の息子かも？という疑心暗鬼でナルト個人を見始めるといふ。

後、これから更新は一週間に1 2回になりそうです。  
できるだけ頑張るので応援お願いします。

## 変わる関係

「ありがとな、兄ちゃん。姉ちゃん。」

「いえいえ、こちらこそ」

「まあ、任務ですから」

現在地は火の国の小さな村。

シナトとアカリは任務でここに来ていた。

内容は行商の護衛。木の葉まで来ていた商人たちが依頼した任務だ。ちなみに上の会話は行商、アカリ、シナトの順だ。ここ最近賊の出現率が少ないため一人でも大丈夫だろうと本来ならシナトの単独任務だった。けど、火影室で丁度アカリと遭遇、そのまま一緒に、だ。聴くところによるとまた日向当主からの文を渡しに来たと言う。

「しかし、暗いなあ」

「まあ、結構離れていましたから」

外は真つ暗、とまでは行かないけど大分日は落ちている。

「良かったら泊まっていかねえか？」

「えっ？」

「しかし……」

「いくら忍といえ、道中疲れたらどう？ 歓迎させてもらうよ。なあ！」

周りにいる村人に問う商人。頷く村人たち。これは断れないだろう。

「ええと、お世話になります。」

夕食をご馳走してもらい寢床に移動中の二人。けど、無言でお互い

に顔は真っ赤だ。

理由は食事中の会話。

「寝床だが丁度空き家が一軒ある。其処を使ってもらいたい」

「空き家と言っても一部屋しかないから物置同然だけだな」

「ああ、ちゃんと掃除はしてあるから安心してくれ」

「男女が同じ屋根の下、しかも同じ部屋。これはもしかすると……」

「無粋なことを言うな。それに、見た感じ二人はそういう関係だろ  
う」

「ああ、確かに」

「美男美女。お似合いだね」

などなど。小さい村だったため村人全員が二人のことを知りお祭り騒ぎになり、村人全員と言っているほど集まった。集まった人達は二人を見て好き勝手言い始めた。それは反論を挟ませない位に。元々は寝床を知らせに来てくれたためしっかり耳を澄ませていた二人だったため後半もしっかり聞いてしまった。言い返そうとも聞く耳なし、そもそも言わせてくれなかった。こんな二人にできたのは顔を真っ赤にさせることだけだった。

このことでシナトはアカリをすっかり意識してしまい、アカリもアカリで意識していた。

二人とも其のことで頭がいっぱい。いつどうやって空き家に来たのかも分からなかった。

「ええと……」

「ひゃいー」

「……………」

声を掛けようにも緊張のため舌がうまく回らず噛み、無言に。因みにこれは数回目だ。



「……………」

「ええと……………」

「ひゃい！」

勇気を振り絞って声を掛けるシナト。負けるな！

「そろそろ寝ようか？」

「えっ！」

シナトの声に真っ赤になるアカリ。何を想像したんだ、ナニを！

「あ、そう…：そうですね。じゃ、じゃあ消しますよ？」

ランタンの火を消すアカリ。それから布団にもぐる。

ちなみに布団はちゃんと2枚用意されていた。が、隙間なく轆かれ  
てはいた。

最初は2人ともドキドキしていたが周りの暗さと無言の世界のため  
徐々に平常になっていった。まあ、それでも背をお互いに向けたま  
まだが。

其の中でアカリは語りだす。

「シナトさん」

「…うん？」

「今日はありがとうございました」

「…どうしたの？」

「任務ですよ。本来なら単独だったのでしょうか？連れてきて頂いて、  
です」

「ああ、其のことなら気にしてないよ。お陰で楽できたし」

笑うシナト。其れに対しアカリは難しい顔だ。同時に何かを決意し  
ている。

「本当に嬉しかったです」

「…………？ああ、ここの村人たち？そうだね。かなり良くして貰った

し」「それに」「…?」

「さっきのような事を言っただけで」

「え?」

「シナトさんと恋人として見られて、です」

「…え?」

「正直言っただけで不安でした。私はシナトさんと吊りあってないのでは、と。」

「……」

「けど此処の人達はそういう風に見てくれた」

「……」

「お陰で勇気が出ました」

「……アカリ」

「私はあなたのことが好きです。一人の女として」

「……アカリ、俺は」

「何かを抱えているのは気付いています」

「っ」

「私が其れを知る権利はきつとないでしょう」

「……」

「けど、支えていきたいのです。少しでも軽くなるように」  
「アカリ」

二人はいつの間にか背ではなく面で向かい合っていた。

変わる関係（後書き）

感想が怖い…。

## シナトの心（前書き）

……オリ主ばつか更新して何やってるんだろっ。  
少し鬱になった厨な人です。

## シナトの心

【シナト】

「……ッ。十尾か？」

此処はシナトの精神世界。十尾の“家”。

【……どうするんじゃ？】

「……」

【……】

二人…一人と一匹（体？柱？）は出会って四年。

これは長いと取るべきか短いと取るべきか。

この二人にとってはきつと

【あのような行動をとったことに後悔しておるのか？】  
「ッ」

前者であろう。

【良いか、シナト。人の行動を起こす過程は二種類ある】

【理性的に判断した行動と感情に動かされて行動する場合じゃ】

【……怖いのは後者じゃろっ】

【一時の感情に流されて行動する】

【後の後悔の原因にもなる】

【だがの

其れの何が悪い？】

【感情的な行動には本人の本質が現れる】

【ここではお主の“愛”だろう】

「……………」

【目を逸らすのは簡単じゃ】

【だがお主は本当に其れでいいのか？】

「それ……は」

十尾の一言一言が刃となってシナトを襲う。  
紛れもなくそれはシナトの心に届いていた。  
これほどのものを貰う資格はあるのか？幸せにできるのか？

そして、自分は此処にいて……

【自分は此処に居る筈のない人間、とか考えておるのじゃろう】

【だがの、儂に言わせて見ればお主は儂の唯一の主おじゃ

【“シナト”は“シナト”で“ナルト”は“ナルト”】

【元は同一だろうと歩む道が違えば別人】

【偽者だがそれがどうした？居る筈がないから何だ？】

【そのような理不尽、何時ものように壊していけば良いじゃないか】

【師から教わった “ど根性”で】

「！……！」



「……ハ、ハハハハ」

「そうだな、そうだってばよ」

「なんだかんだ考える頭脳派じゃないな、俺は」

「自分を信じ己を曲げず貫く」

「大事な事、わすれるところだった」

「サンキューな、十尾」

【……ふん】

夜が明けた。

ある村のある空き家の玄関先。其処には二人の男女がいた。

今までとは違う顔つきで。

~~~~~其のころの木の葉~~~~~

「ん、おはようだってば、じっちゃん」

「おはようナルト。実はのお主に言うことがあった」

「ん？何だつてば？」

「お主の引き取り先が決まった」

「ああ、安心しろ。場所はシナトと一緒にじゃ。それに此処もお主の家。いつでも遊びにこい」

「……うん。分かったてば」

「よし」

「それで、どこだつてば？」

「ああ、それはの

日向邸じゃ

## シナトの心（後書き）

後半でシナトの住居の正式な決定。

ちなみにアカリが持ち込んでいた文。実はこれに関すること、と言う設定。

それと気付いたんだがシナト16歳。うん、これはまあいいでしょう。

アカリ13歳。うん、ちょいまずいかな？

………いつ死ぬか分からない世界なので問題ないということでの理解を。

………触れるのは怖いが十尾の説教（？）部分。こっちのほうが良いよ・カッコいいよ、と言うのがあれば是非指摘を。

かなり覚悟で投稿をした厨な人でした。（どんな覚悟だよ）  
これからもNARUTO（時空を超えた邂逅）を宜しくです。

## 二年の日々・修行

シナトが木の葉に来てから早2年。

たった2年と言えどいろいろなことがあった。

一番の変化は婚約者だろう。アカリとの中は良好、そろそろ結婚も考えているところだ。まあ、住居が日向邸に決まり、既に同じ屋根の下のため周りから夫婦に思われている節があるが。ああ、後ナルトも一緒に住むようになった。一応『九尾の人柱力』だから周りはいいのかと心配したが、ヒアシさん曰く、「里人はあまり九尾と同一視していない」らしい。詳しく聞くと、4代目と容姿が似ている俺と兄弟に見えるらしく、“もしかしたら4代目の子では”という考えが広まっているみたいだ。けど未だ憎しみは消えず。手を出す人は居ないみたいだが接触を避けている人はたくさん居るそうだ。

そんなナルトが今から約1年ぐらい前、突然

「修行を付けてくれってば！」

といって部屋に突入してきたときは驚いた。理由は聞かせてもらえなかったけど、瞳を見て判断。修行を付けることに。アカリも聞かえていたらしく一緒に見ることに。“ヒナタ”や“ハナビ”のほうがいいのか、と聞くとどうやらヒアシさんとヒナタがハナビに付きっ切りのため自分は少し触れ合うだけで良いそうだ。……ああ、ハナビはヒナタの妹で数ヶ月前に産まれたばかりだ。

ヒアシさんに一声掛けてアカリ・ナルトと演習場へ。

取りあえず自分が以前力カシに教わった順番と同じようにすることに決めた。

『手要らずの木登り』のやり方を教え傍観に。どうやら此方のナルトは何かしらの忍道を決めているそうだ。恥ずかしいのか教えてく

れなかったけど予想はできるため教えてくれる日を待つことに。  
木登りはどうやら上手くいかず結局今日は帰宅することに。チャクラの練り方が雑な為その反省をしながらの帰宅だった。

それから一週間ようやく木の枝のところまで到達することができた。とは言え、その枝はあまり高いところではなかったが。けど、初めてということもあり大喜び。一楽で奮発してあげた。

その後もどんどん腕を上げ半年経つ頃にはもうかなり高い木の頂上までいけるようになった。

その頃はアカリの方にヒナタが修行を付けてほしいと直談してきたらしい。どうやらナルトの姿を見て一層気合を入れたため凄かった、とアカリが言っていた。それによりナルトの修行は俺一人で見ること。アカリのことを聞いてきたので話したらナルトもナルトでよーり一層気合を。

ナルトが頂上で喜んでいるとき、“事”が起こった。

突風により体が崩れ落下。それに気付いてすぐに落下地点へ。地面との衝突は避けられた。

が、途中で枝に打つたのだろうかナルトに意識はない。が、命には別状がなく手当てをしようとした。

手を翳した途端、意識が薄れていく感じがした。敵かと思い、直に自分とナルトの周りにクナイを指し、時空間忍術“四頂結界”を発動。それを確認すると同時に意識は落ちる。

だが、そこで見たのは“かつて”の自分の心象世界である九尾の牢獄。本能に従い歩いていくと広い場所へ。そこにいたのは九尾

ではなく『父』と『母』。

そのことに驚きで固まっている所に声が。

ありがとう、ナルト

父と母からの声。そして自分を“ナルト”という。

それにより理性が働く前に体が動いていた。気付いた時には両親に抱きかかえられていた。

俺がこの世界に飛ばされたとき、時空の歪みが生じそれを時空間忍術の使い手であった父さんがキャッチ。どうやら『前の世界』での『記録』であつたらしい。『記録』とは何か、と聞くと『知識』でありそれにより自分のことを知った、と。

それから取り留めのない話をして過ごした。意識が戻るとき泣いてしまったの内緒だ。

意識が戻ったところで最初に見たのは自分の隣で横になっているナルト。規則正しい寝息が聞こえることから意識は戻ったんだな、と安堵。それと同時にしっかり守らないと、と決心。背に抱えて帰宅する。

その後は『水面歩行の業』を教えながら過ごす。時々任務が入ったりして見れないときはチャクラコントロールの訓練をしていたらしい。それから、ある日『変化の術』や『分身の術』といった基本忍術を教えていないことに気付き焦ったりもした。まあ、印を教えたらある程度遣つて退けた。これなら『螺旋丸』を教える日が近いかもなー、とか考えていた。

そんなこんなで過ごしていた今日、火影の爺さんに呼ばれ火影室に。爺さんは俺が入るなりこう言った。

「自来也の奴から連絡があった。約一年後木の葉による、と」

## 二年の日々・修行（後書き）

どうも、厨な人です。

さあ、ナルト幼少期は次でラストですかね。

そこから主人公をナルトに移して下忍時代といこうかなとか考えています。

とはいえ、実行するか分かりませんが。

後、アカリを自来也との旅に連れて行かせようか迷っています。

まあ、シナトが旅に行くのは決定ですがね。

これからもNARUTO - 時空を超えた邂逅 - を宜しく願います。



## 自来也来訪？

自来也が帰って来ると聞いて早8ヶ月。

ナルトは『水面歩行の業』をほぼマスターしたと聞いていいほどの領域にきた。今では水面上でシナトとの組み手で実戦で使えるようにしているところだ。また、シナトの代名詞であり、彼の先の得意技“螺旋丸”の修行にも入っている。

ヒナタも腕をかなり上げた。特に『守』の柔拳に力を入れている。『守』の柔拳は『攻』の柔拳に比べてチャクラコントロールが難しい。……それもそうだろう。『攻』の主な柔拳は相手の“点穴”を突く“八卦六四掌”、或は全身の点穴からチャクラを放出し自身を駒の様に回す“回天”。他にも“八卦空掌”など存在には在るが使い手が少ない。そういう点を踏まえると数えて10にも満たないヒナタが『守』の柔拳を使うと言うことはかなりの実力を示す。…残念なことに本人は気付いていないが。

あと変わったことといえばナルトとヒナタに同世代の共通の“友”であり“ライバル”であり“家族”である者が加わったことだろう。名は“日向ネジ”。現在日向分家の頂に立つ“日向ヒザシ”の息子。ヒナタの従兄弟に当たる。自来也の一件を聞いた兄のヒアシに召還されたときに連れてきたのがきっかけだ。当時はギクシヤクする場もあったが今では影も形も見えない。彼の日課はヒナタかナルトと模擬戦をするか談話をするかだろう。取りあえず本家に居る間はナルトかヒナタ、もしくは両方と一緒に目に入る。

シナトとアカリはこの変化に喜んでいた。どうしてヒアシがヒザシを召還したかは分からない物の感謝もしていた。……二人の、特にシナトの“失敗”であり“成功”はここで召還した理由を聞かなかったことだろう。この性で後で頭を抱えることになる。……誰の、とは言わないでおこう。意味はないだろうが。

今日、陽が昇り始めた時刻。木の葉隠れの里をくぐる一人の老人がいた。

いや、老人というのはおかしいかもしれない。それは言葉の魔力だろう。老人と聞くと“年取った人”であり“老いた人”をイメージする。“老いた”人からはなぜか“衰えた”人へと変換される。“衰える”ということは生命・活動力が弱った状態を指す。こういうことから改めて言うが老人というのはおかしいかもしれない。その人物の名は“自来也”。木の葉が誇る“三忍”の一人である。

〈自来也 side〉

「久しぶりじゃのう」

ここにきたのはシナトと分かれたとき以来。…3年ぶりのか。  
この三年間のシナトの状況は爺を通して聞いていたが……驚いた。  
まさかあの“日向の姫”を手に入れるとはのう。儂が後10年若け  
……ゴホンッ。

連れて行くのは多少引けるがそうも言つてられない。此処最近大蛇  
の奴が変な集団に参加した性でやり難くなった。…中にはあの霧隠  
れの“干柿鬼鮫”もいたしの。

取りあえずは爺に挨拶に行くか。……と、ここは温泉？

ということは……！！！！

「おんにゃによー！！！！！！！！」

時間が早かったため中には誰も居なかったのはご愛嬌だろう。

～自来也 side end～

～シナト side～

自来也が木の葉に来たという知らせを爺から聞いて火影邸に。

そこで視たのは入り口で逆さに吊るされているエロ仙人。即体を反  
転し帰路へと……

「おい、シナト！」

……できなかつた。

取りあえず左右前後、360度見渡し、更に気配を探って人目はな  
いことを確認する。

誰もあんな変人と話しているところなんて見たくないだろう。

「だれが変人じゃ！」

心を読むな

「詠んでない！」

…確かに詠んではないな。戯言だが。

「……性格変わっておらんか？」

誰の性だと思っている。

「助けてくれ」

今の流れをぶちきるのか。というかなぜ？

「その“なぜ？”はどうしてこうなったかの理由かの？」

それも気になる。が、凡そ女子風呂を覗こうとしたが誰も居なかった腹いせにどこかのくノ一に手を出した結果だろう？

“なぜ”は“なぜ助けなければならぬ？”の“なぜ”だ。

「なぜそこまで分かる」

あんたのやることなんて限られてる。

「……お主は儂をどう見ておる」

変人・変態・変質者・オカマ忍者。

「大蛇丸と一緒にするな！」

同じだろう。「三忍」という括りで。

「それでもじゃー！」

……で?“なぜ”の答えは？

「無視するでない！」

おや？さっき同じことをされたような。

「……それは師匠命令じゃ」

俺は“此処”の世界のあんたに教わったことはないぜ？

「ならば“主人”の命令じゃ。お主は僕の付き人じゃろう？」

……シズネさんの苦勞が分かったぞ。

「綱手の奴と一緒にするでない！」

どっこいどっこいだ。

結局、自来也が降ろされたのは半刻後だった。……幸い誰にも見られてない。

シナトside end

side

「おい」

「どうしました？兄さん」

「目標が木の葉に来た」

「……ということは」

「ああ、今夜だ」

「了解です」

「チャクラをしっかりと温存しておけよ。相手はあの三忍だ」

「三忍だろうと私たち一族には勝てないでしょう。……それに」

「ああ」

「息子・娘のためだ！」

「負けなど有り得ない！！」

side end

## 自来也来訪？（後書き）

久しぶりです。

一週間空いてしまいましたが10話目を無事投稿。

今回は独自解釈が多いですねえ。

………真にすみません。そんな設定じゃねえ！と思うかもしれませんが大目に見ていただけると幸いです。

後ギャグも入れてみました。（ギャグと言って良いのだろうか

これからもNARUTO - 時空を超えた邂逅 - を宜しく願います。

## 暴走、そして未来へ

（自来也 side）

「はあ、相変わらずでかいのう」

僕は今日向邸の前に居る。

シナトを木の葉につれてきてから早三年。

彼奴は以前も木の葉。ならばすぐになじめると思っていたが…嫁を

それも『日向の姫』というとびっきりの 貰っているとは。

「先を越されてしまったのう」

笑いが込みあがる。

まさか師匠である僕より先に結婚するとは。

だが、裏を返せば『帰る場所』と『生きる理由』ができたということ。

此処は素直に祝福しておくか。

「しかし、そうなると…」

気が引ける。せっかく手に入れた幸福を僕が引き裂くことになるとは。

だが、此方も引けぬ。大蛇丸の奴が変な組織が入った。その組織にはあの『干柿 鬼鮫』がある。他にもやばい奴が居るかもしれん。

……戦力は多いことに越したことはない。



シナトを連れて行くためにも…どつやって日向兄弟を説得しようかの。

～自来也 side end～

自来也は知らない。

その説得が不可能だということに。

自来也は気付かない。

日向邸が殺気に包まれていることに。

～シナト side～

「でも、びっくりしました。父上があんなことを言うなんて」

「……だよな。俺もびっくりだ」

エロ仙人と別れて帰ったらヒアシさんがアカリを連れてきて『デートしてこい』とか言うなんて。

「父上から『デート』なんて言葉が出るなんて…。明日は槍が降るのかしら?」

「アハハ。それは言い過ぎじゃ…?」

「そんなことはないですよ。以前じゃ絶対に考えられません」

力説するアカリ。その腕は俺の腕に組まれてる。この暖かさからも

……

「シナトさん」

「ん？」

おっと。気が逸れてしまったか。イカンイカ…

「離れたくありません」

「…ッ」

アカリ…。

「迷惑なのは百も承知ですが、それでも…ッ」

……。

「やっぱり無理ですよ…ンッ!？」

ああ、もう！

腕を解き、強引に向かい合わせて口を閉じさせる。…口で。

「…え？」

呆然としているな。……こんな従来でやっちゃまったが大丈夫だろうか？ いや、今はいいか、そんなこと。

「…何とかしてみせるさ。俺だって離れたくないし」

シナトside end

その後、お互いに真っ赤になり、また、外と言うこともあって辺りを見回した。

幸い誰も居なかったが、これ以上一緒に居るとどうなるか分からない。かといって離れるのも嫌だ、ということで早いけど帰ることになった。

そこで、二人は見ることになる。

廃墟同然となっている日向邸を

そして、その中心に居る二人の鬼を。

これが後に表には『日向の乱』と、関係者には『日向兄弟の親馬鹿事件』と呼ばれる事件だった。

（一カ月後）

あの事件で倒壊した日向邸の下から発掘された自来也。すぐに木の葉病院に運ばれた。幸い、三日後には眼を覚ましたが『日向怖い』『柔拳は……』『すみませんすみません』と完全に壊れていたため再び眠ってもらうことになった。

起こした当人たちは『話が噛み合わなかったから肉体言語と言ったことになった』の一点張り。そして、そのことに突っ込んだら殺す、という空気を醸し出していた為お咎めなしとなった。

シナトとアカリはその時一緒に訓練していたナルトとヒナタを連れて火影の下へ。家の状況だけ説明し、一時近くのアパートを借りて生活……もとい、現実逃避していた。

自来也が再度復活したということで病院に行き、詳しい事情を聞いた。それによると、シナトを連れて行くという話のところまでは詳細に話してくれたがその後は全く覚えてないと言う。

記憶を見て貰おうか？と冗談交じりに言ってみたところ、山中上忍 山中イノイチさんが真つ青な顔をして拒否。日向兄弟の性格を知っている故の反応だろう。

最終的には、シナトが特殊な影分身：自身のチャクラ半分と十尾のチャクラ八割を使った影分身を自来也に付けると言うことで落ち着いた。保険で、影分身が消されたら直に駆けつけるよう飛雷神の術用のクナイを何本か渡した。

これにより、『日向の乱』もとい『日向兄弟の親馬鹿事件』は幕を閉じた。

兄弟が暴走した原因の二人は日向の屋敷の中に家を建て、新婚生活を営んでいたやらなんやら。

詳しいことは神（作者）すら知らない。

暴走、そして未来へ（後書き）

詳しいことは後書きで

…後書きも詳しくないか（汗）

質問・感想は受け付けております。

## 後書き（1 / 15 編集）

取りあえず、無理やりですが完結させていただきました。

読み返してみても『あれ？これなら一応完結できるんじゃない？』と思いましたが、本当に無理やりになってしまいました。もう少し二人の新婚生活を書ければ…と思っています。もしかしたら息抜きで書くかもしれません。そのときは宜しくお願いします。

（追伸）

- ・リメイク版は三月から投稿します。
- ・前日は『そのときはこの小説は消去する』と言いましたがそれはなしの方向で持って生きたいと思います。
- ・相変わらず感想は返事を返せませんが是非何か一言お願いします。それを糧に頑張っていこうと思っていますので。

（旧・お知らせ）

まずはお詫びを。

此方の事情で更新をストップしてしまつてすいませんでした。

そしてお知らせです。

この度、もう一度読み直してみても『創始眼』はチート過ぎねえか…  
…！！ということから書き直さすことになりました。

現在プロローグは書き終わっていますが、これから3月頃まで更新が厳しくなります。

ちよくちよく溜めて三月に纏めて投稿するか、今すぐ投稿してしばらく放置するのかで迷っています。そこら辺どちらがいいか感想に書き込みをお願いします。

最後にもう一度。

更新を長らく止め、此方の事情でこのような結果になってしまって申し訳ございません。

（追伸）

- ・ 此方の小説は2012.3には消去させていただきました。
- ・ 感想は返せないのので先に謝罪します。すいません。
- ・ NARUTO - 時空を超えた邂逅 - を愛読してくださった方々、真にありがとうございます。
- ・ 新たに書く小説の題名はこの小説と同じにします。
- ・ これからも宜しくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3618w/>

---

NARUTO - 時空を超えた邂逅 -

2012年1月15日01時06分発行